

[博士論文審査要旨]

申請者：豊田 紗綾

論文題目 友人との集団意思決定への参加意図の形成メカニズム：  
旅行の意思決定を事例として

審査員 松井 剛  
古川 一郎  
鎌田 裕美

本論文は、友人との旅行の意思決定を事例として、集団での意思決定プロセスの解明を主たる目的とするものである。特に注目しているのは、ある一部のメンバーが他のメンバーの代理として意思決定プロセスを遂行していく代理性（delegation）という現象である。

本論文の貢献として3点、指摘できる。

第1の貢献は、極めて日常的に経験されているにも関わらず、既存研究が等閑視してきた友人集団による意思決定についての本格的な実証研究を提供したことである。これまで消費者行動研究では、家族や組織といった集団の意思決定についての研究の蓄積があるものの、友人集団については、内外を問わず十分な研究蓄積がない。

第2の貢献は、質的データと量的データの丁寧な収集および分析である。友人集団の意思決定のリアリティに迫る大量のインタビューデータ（45名、44万字超）の質的コーディングをしたり、自由回答記述データ（447名、3万字弱）の計量テキスト分析をすることで、「集団意思決定への参加意図の形成モデル」における仮説の構築や検証といった量的なデータの分析を説得力のあるものとしている。

第3の貢献は、集団による意思決定についての理論的な貢献を実現していることである。本論文は、先行研究で示唆されていた「まとめ役」が集団意思決定に参加するに至る心理的メカニズムを明らかにしたことである。これは、計画的行動理論など先行研究の理論的到達点を理解した上で、自己決定性の程度を表すRAI指標（Relative Autonomy Index）を活用した分析を行うといった工夫がゆえに実現したことである。

しかし課題がないわけではない。第1に、本論文が、集団の意思決定一般に関心があるのか、旅行に関する意思決定について関心があるのか、という点が必ずしも明確でなかった。旅行以外の集団の意思決定との異同をより明確にすることで、本論文のポジショニングがより明確になるはずである。第2に、質的データは学生のみから収集しているのに対して、量的データは社会人からも収集していることである。友人関係は、大人になるほど多様かつ複雑なものになるが、その複雑性を視野に入れた量的分析になっているか、という点で疑問が残る。しかし、むしろこうした課題は、今後、研究を発展させるべき方向性を示している

と言え、決して本論文の価値を損なうものではない。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する。